

武士道ブームと英訳『仮名手本忠臣蔵』

——井上十吉訳の初版と第2版との比較を通じて——

川内 有子 (立命館大学大学院文学研究科)

E-mail lt015072@ed.ritsumei.ac.jp

要旨

本研究では、井上十吉(1862-1929)の英訳『仮名手本忠臣蔵』(1894)とその第2版(1910)を比較し、出版背景から相違点について考察する。

国内の英語学習者を読者として想定した初版と海外志向が明確な第2版との注目される違いは、第2版では“Bushido”の概念が討ち入り事件の軸と位置付けられている点である。赤穂事件と“Bushido”を関連づける捉え方は、それ以前の翻訳や解説には見られず、新渡戸稲造の著書 *Bushido* (1900) の成功が影響していると考えられる。1900年前後の“Bushido”の認識の国際的な変遷と第2版の序文の内容との照合から、近代的な愛国心としての“Bushido”を海外に広めようとする軍事教育会の活動と井上の翻訳官としての参加が第2版の出版背景として関与していることが分かった。

abstract

This paper discusses the historical background of the two editions, the first (1894) and the second (1910), of English translation of *Kanadehon Chushingura* by Inoue Jukichi (1862-1929). The difference between these two editions was that Inoue indicated his intention to have foreign readers more clearly in the second edition and started using the word “Bushido” which attained recognition among the Westerners after the publication of *Bushido* (1900) by Nitobe Inazo as a key concept to describe the spirit of 47 ronins. The survey of the international recognition of “Bushido” and its usage in Japan reveals that Inoue took part in the movement of the Military Education Association to promote the modernized definition of “Bushido” as nationalism and the second edition also belongs to this context.

はじめに

井上十吉(1862-1929)は、神田及武、斎藤秀三郎と並んで、三大英学者と数えられた明治大正期を代表する英語学者である。徳島藩主蜂須賀家の高臣であった井上高格(のちに代議士、徳島市長となる)の次男として生まれた井上は、明治6(1873)年に、主家の子息や、兄・省三らとともにイギリスへ留学し、初めての日本人学生としてラグビー校で学び、ロンドンのキングスカレッジを経て、王立鉱山学校で採鉱学を修め、11年の留学期間を終えて、21歳の青年となって日本へ帰国した。帰国後は、鉱山技師になるはずであったところを教育界へと転向し、その後、*Japan Gazette*の記者を経て、明治27(1894)年から大正7(1918)

年まで、翻訳官として外務省に勤務した¹⁾。

井上の業績は、主に英語教科書や英和・和英辞典などの編纂で知られ、明治期の日本の英語教育に大きく影響を与えたが、それら語学書だけでなく、*Sketches of Tokyo Life* (1895)や *A concise history of the war between Japan and China* (1895)²⁾ などといった、英語での著作も発表した。井上は、英語教育関係の著作のほかに、日本古典文学の英訳も行った。『近代文学研究叢書』にまとめられた井上の著作年表によれば、井上の手による翻訳には、『菅原伝授手習鑑』より「寺子屋」(初出『少年園』、1885)、『平家物語』より「敦盛」(初出『少年園』、1888)、『大岡政談』より「天一坊物」(初出 *Museum*、1889) などがあり、なかでも『仮名手本忠臣蔵』は、明治から昭和にかけて第4版まで出版された³⁾。

通常、日本文学の海外における受容を問題にする際、日本人による翻訳が重要視されることはほとんどなく⁴⁾、井上の翻訳も、英語教育における功績に比較すると注目されることは少ない。『仮名手本忠臣蔵』の翻訳も、発表当時の海外の新聞・雑誌などでの言及が見られないことから、多くの読者を得たとは言い難い。しかし、1860年代から、西洋人から日本人の国民性を表す象徴的なエピソードとして取り上げられてきた⁵⁾赤穂事件・『仮名手本忠臣蔵』が、日本人によって海外に発信された事例として井上訳は興味深い。

また、初版と第2版の出版時期が、明治27(1894)年と明治43(1910)年という、日清戦争・日露戦争や、欧米諸国で大反響を呼んだ新渡戸稲造の*Bushido*⁶⁾(1900)の出版とそれに続く武士道ブームの前後にまたがっており、初版と第2版との比較は、社会的・文化的背景と文学作品の受容の関係に関する議論に具体的な示唆を与えるのではないだろうか。本研究では、井上十吉訳『仮名手本忠臣蔵』の初版と第2版の相違点の指摘を端緒として、新渡戸稲造の*Bushido*と武士道ブームに注目し、社会的・文化的背景が赤穂事件および『仮名手本忠臣蔵』の受容に与えた影響について考察したい。

英訳『仮名手本忠臣蔵』初版と第2版の違い

井上十吉没年に『英語青年』に掲載された、井上同様に明治大正期の英語教育に貢献した磯部弥一郎の筆による追悼記事によれば、井上訳『仮名手本忠臣蔵』の初出は、英語雑誌において掲載されたようである⁷⁾。初出は、掲載誌や時期を含めて不明であり、タイトルや体裁について、現在のところ知ることはできない。

初版は、明治27(1894)年に、*Chushingura or the Loyal Retainers of Akao*の題で、富岡英洗の手による挿絵や口絵が約40点つけられた和綴じ本として、博文館から出版された⁸⁾。まず、Introductionにおいて、近代実証史学を用いて赤穂事件を検証した重野安績の『赤穂義士実話』(1889)に依

拠して歴史事件としての赤穂事件のあらましについて説明し、『仮名手本忠臣蔵』各段の梗概と英訳で該当する箇所を説明する。登場人物名は、大星、塩谷、高などの『仮名手本忠臣蔵』上の役名は用いず、大石、浅野、吉良など歴史上の名前へと置き換えなおして翻訳している。本文は浄瑠璃本に依拠しているが、11段の構成を5幕ものへと再構成し、序段と二段目はほとんど説明にとどめ、三段目とまとめてAct. Iへと組み入れ、桃井若狭之助を伊達左京亮へと変更し、加古川本蔵を梶川与惣兵衛へと変更した関係から、本蔵とその家族が軸となる八段目と九段目は完全にカットしてしまうなど、原典に大胆に手を加えている。

初版発行から14年が経過した明治43(1911)年には、大規模な増補を行った改訂版が、*Chushingura, or the Treasury of Loyal Retainers*として、出版元を中西屋書店に変えて出版された⁹⁾。第2版には、出版広告によれば、特製と並製の2種類が用意されており、並製は洋装で挿絵が2枚ついており、特製は、初版と同様に和綴じ本¹⁰⁾で、四十七士の羽織を意識した雁木模様と二つ巴の模様の象られた刀の鍔が打ち出された布地の表紙がつき、挿絵は、初版を飾っていた英洗の口絵・挿絵ではなく、北斎や国芳、国貞などの浮世絵がそれぞれの段に1枚、挿絵としてカラーで使用されている。第2版のPrefaceで翻訳者本人から説明されているが、初版において省略された3つの段は第2版では本文に組み入れられ、『仮名手本忠臣蔵』の11段の構成が、今度は忠実に再現されている。登場人物の名前も、歴史上の名前から、原典で使用される大星、塩谷、高といった名前に戻されている。ほぼ同様の内容で、大正7(1917)年に第3版、井上没後となる昭和12(1937)年には、井上十吉の子息・井上東蔵の手を借り、秩入りで和綴じの縮緬表紙のついた豪華本として第4版が出版された。

初版の序文には、訳者自身によって、『仮名手本忠臣蔵』英訳の試みについて、“to give a readable rendering of the most celebrated plays in Japan¹¹⁾”と、日本の芝居の傑作である『仮名手本忠臣蔵』の読みやすい翻訳を提供することにあつたことが述べられているが、この“readable”が誰にとつ

ての読みやすさを指すのか、英訳の想定された読者がどのような人々であったのかについて、序文から知ることはできない。

さきにふれたように、井上は、『仮名手本忠臣蔵』のほかにも日本の古典文学の英訳を行い、英語雑誌上で発表しているが、これらの英訳も含め、外国語訳であるからといって一概に外国人向け・国外需要向けであると結びつけることはできない。例えば、『平家物語』から敦盛の最期を英訳し雑誌『少年園』に掲載、式亭三馬の『四十八癖』の英訳を和文英訳例として『英語青年』誌上で3回にわたって連載しているが、前者は国内向けの少年雑誌で、後者も、英語学習を志す日本人、ことに地方にあって直接高度な英語教育が受けられない人々から熱心に講読された雑誌である。明治・大正期には、『英語青年』以外にも、『日本英学新誌』や『中外英字新聞』など、日本人の英語学習者向けの雑誌の刊行がさかんに行われ¹²⁾、これらに掲載される英訳は、英語学習者のために和文英訳の実例を提供することを主な目的としたものであった。

無論、英訳『仮名手本忠臣蔵』の出版が、外国人読者を全く想定していないものであったはずはないが¹³⁾、読者のなかに英語を学習する日本人の存在を相当な割合で想定していたと考えてよいだろう。実際に、ともに硯友社のメンバーであった江見水蔭と巖谷小波とが、井上の英訳『仮名手本忠臣蔵』を用いて学生時代に英語劇を演じたことが江見によって記録されている¹⁴⁾。

それに対し、第2版には、海外の読者へ向けた英訳としての意図がより強く感じられる。第2版のPrefaceを引用して比較してみたい。井上は、この第2版について、“I trust the present work will at least give the reader some idea of the most popular version of the most famous vendetta in Japanese history.”¹⁵⁾と述べている。ここでも、この翻訳が誰に対して向けられているのか明示されていないが、「この版なら、日本史上においてもっとも有名な復讐劇の一番よく知られた型について、読者諸君にいくらかでも伝えることが出来るはず」という記述からは、原典である『仮名手本忠臣蔵』を知らない人々、つまり外国人読者が読者として意

識されていることがわかる。さらに、こうした読者たちの作品の精神の理解を助けることを目的として、長いIntroductionを付したと続けていることから、予備知識のない読者への目配りが初版よりも行き届いていることが確認できる。海外での流通が確認できなかった初版とは対照的に、第2版にはイギリスで読者を得た可能性が指摘されている。

1915年に、イギリスの桂冠詩人 John Masefield (1878-1967) が赤穂事件や忠臣蔵を下敷きとして *The Faithful*¹⁶⁾ という題の3幕構成の戯曲を発表し、賛否両論の評価を得ながら、イギリス国内だけでなく、ニューヨークやハワイでも再演された。*The Faithful* を執筆するにあたり Masefield が参考にした本について、本人から直接回答を得た Gatenby (1937) によれば、一組の浮世絵、1871年にイギリスで出版されて出版直後から多くの読者を得ていた A. B. Mitford の *Tales of Old Japan*、『仮名手本忠臣蔵』の2つの英訳、そして、ロンドンにいる日本人学生から聞いた四十七士についての話が材料となっていたそうである¹⁷⁾。ただし、この2つの英訳について、Gatenby は、1つはこれもイギリスで出版されていた F. V. Dickins による初めての英訳と推定し、もう1つを、横浜の写真家であった小川一真と夏目漱石の恩師であったことで知られるお雇い外国人 James Murdoch の写真付きの梗概本ではなかったかと推定している。一方、日本における *Hamlet* の翻案とイギリスにおける『仮名手本忠臣蔵』の翻案とを比較した Wetmore (2008) は、Masefield と忠臣蔵との出会いを、日本趣味であった W. B. Yeats と Masefield との親交から仕入れたのではないかとし、具体的な題材としては、Gatenby 同様、まずは Dickins の浄瑠璃本をもとにした翻訳を参照しただろうと推定しているが、1910年には井上十吉訳もイギリスで入手可能になったため、井上訳も目にしたのではないかと指摘している¹⁸⁾。Wetmore は初版、第2版のどちらがイギリスで流通していたか明言していないが、この1910年という時期のくくりから推察するに、第2版のことを指しているであろう。

初版と第2版との間で注目される違いは海外志向の有無の他にもあり、第2版のPrefaceでふられた、武士文化、元禄時代、赤穂事件など『仮

名手本忠臣蔵』の背景の理解を助ける長大な説明の中に、初版には一切登場しなかった“Bushido”の語が突然登場し、侍の行動規範や道徳・美学を意味する語として、その説明のために一節が設けられている。説明の冒頭で、井上は、赤穂事件は、“outward expression of the spirit of Bushido¹⁹⁾”であったとまとめる。赤穂事件を武士道と結びつけることは現在では自然なもののように思われるが、この第2版以前に、赤穂事件や忠臣蔵について英語で述べた文脈のなかで“samurai”の語が用いられることは頻繁にあっても、“Bushido”が現れたのは初めてではないかと思われる。

武士道ブームとのかかわり

初版から第2版にかけてのこうした方向性の転換は、何を背景に生じたのであろうか。初版から第2版にかけて、内容は大幅に改訂され、作業としてはほとんど翻訳し直したと言ってもいい。第2版のPrefaceには、なぜ井上が再び『仮名手本忠臣蔵』に取り組むこととなったのかについて、“I was lately asked by Messrs. Nakanishiya to touch up my old translation for republication.²⁰⁾”という、気になる一節がある。ここから分かるのは、第2版の出版は、訳者本人の必要性から始まったものではなく、出版社からの要請という、需要の発生に応じたものだった。ここでは、第2版になって突然キーワードとして“Bushido”が登場することに着目し、第2版の背景について考えてみたい。

井上は、英訳『仮名手本忠臣蔵』第2版のIntroductionにおいて、“Bushido and its Characteristics”と題した節を設け、まず“a peculiar product of our country”と武士道が日本固有のものであることを定義したうえで、奈良・飛鳥時代からの“Bushido”の歴史的展開を解説しているが²¹⁾、その特徴を“the high esteem for military valour and practice of military arts”(武勇の誉れと武術の実践)、“the path of loyalty”(忠義の道)、“the high estimation of honesty and integrity and disregard of pecuniary profit”(誠実さや清廉さ

の重視と金銭への無頓着)の3点にまとめ、そこにこれら3つに比べると少し弱いが重要な要素として“the keeping of one's word”を付け加える。このうち第一の特徴の説明の最後に、その名に傷をつけないことが武士にとっては命よりはるかに重要であったと説き、この節のまとめとして、また改めて“Bushido”が日本固有のものであることを繰り返している。なぜ、井上は、すでに“samurai”という外国人にも認知された語があるにも関わらず、わざわざ説明が必要な語を以て赤穂事件および『仮名手本忠臣蔵』の討ち入りの精神としたのだろうか。

B. H. Chamberlain (1850-1935) の *Things Japanese* は、日本に関するあらゆる事柄について、1870年代から本格的に活動を開始した The Asiatic Society of Japan の研究成果に基づいて百科事典の形式でまとめ、1890年に初版、1891年に第2版、1898年に第3版、1902年に第4版、1905年に第5版、そして、1935年にChamberlainが亡くなった後の1939年に出版された第6版まで刊行されている²²⁾。その内容は、研究の進展や、人々の関心など時流を反映して改訂され、項目も版ごとに増減がなされていることから、日本に関する英語圏での認識の通時的な変化の指標とするのに適している。

この *Things Japanese* に“Bushido”の語が登場するのは、1902年出版の第4版以降のことで、はじめは新渡戸稲造の *Bushido* の書名としてのみ登場し、その書名も、“the Soul of Japan”と英語訳が付されている²³⁾。新渡戸の本は、Chamberlainによって、近年発表された日本に関する本のなかで特に大きな反響を呼んだ一篇であると紹介され、“samurai”の項目の中では、A. B. Mitford の *Tales of Old Japan* (1871) などとともに、参考図書としてあげられ、“Japanese chivalry”やその道徳規範についての考察が述べられた、日本人によって書かれた良書であるととりあげている²⁴⁾。ここで確認したいのは、1902年の段階では、“Bushido”は“samurai”のようにローマ字表記するだけでは理解されず、英訳が必要な語で、概念としては“samurai”に含まれるものであったということである。それが、1927年に出版された第5版増補版では、“Bushido”に関する記述が巻末のAppendixに付け加えられている。

これは、1912年に*The Rationalist Press Association of London* から発表された、Chamberlain の *The Invention of a New Religion* と題された論文が再掲載されたものである。その内容は、あたかも古来受け継がれてきた日本人の精神であるかのように崇め奉られている“Bushido”だが、これまで P. Siebold や E. Satow ら日本をよく知る外国人がどうしてか“Bushido”に関する著作を残していない。その理由は、単純で、ごく最近になるまで“Bushido”というものは全く知られていなかったのだという趣旨であった²⁵⁾。“Bushido”の概念を近代日本の発明品であったと述べる Chamberlain の論には、佐藤堅司 (1939)²⁶⁾をはじめとして、近代に入る以前から日本には武士道が概念として存在したという日本人の側から反論もあったが、こうした Chamberlain の一連の記述から分かるのは、新渡戸稲造の *Bushido* は“samurai”の行動規範や美学を“Bushido”として国内外に周知させるのに一役買い、その前と後では海外での認知において、天地ほどの差があったということである。

こうして“Bushido”の語が二十世紀に入って以降、海外での認知度が飛躍的に向上した状況は、日本国内でももちろん知られていた。明治39(1906)年に明治天皇へのガーター勲章授与に随行し、36年ぶりに再来日した A. B. Mitford (1837-1916) は、滞在中の様子を綴った *The Garter Mission to Japan* (1906)²⁷⁾ において、日露戦争後の日本について描写している。その中で Mitford は、日露戦争で戦死し、英雄として崇められていた広瀬武夫について述べる際に“Bushido”という言葉で“First of all things duty. Duty to the Fatherland. Duty before life itself.”と説明を加えて使用している。当時日本で“Bushido”が日露戦争での勝利と結びつけられた徳目で、優れた兵士を養成するのに適した概念であることを説いた本文中の他の用例²⁸⁾も考えあわせると、1906年には、“Bushido”の概念は、広く侍としての行動規範や美学を指すものではなく、国のために命を投げ出すこと、国のために死を覚悟して立派な兵士となれるよう幼時から努めることを意味するようになっていたようである。さらに、かつて勤務したイギリス領事館から目と鼻の先の泉岳寺を再訪した際の記述からは、自らの著作に

よって四十七士の物語を西洋社会に広めた Mitford にとって、四十七士が例となって示す“the unwritten laws which governed the conduct of the Samurai in mediaeval times²⁹⁾”、江戸時代の侍の不文律と、“Bushido”とは連続性があるものとは見なされていなかったこともわかる。

Mitford が観察したように、「武士道」が日本国内で少年や兵士の教育において、ナショナリズムを高揚させるために用いられたのは事実である³⁰⁾。「武士道」の意味が、愛国心や日本という国のために死ぬ覚悟が備わっていることへと転じていく中で大きな役割を果たしたのが、1890年に帝国大学の哲学教授に日本人として初めて就任した井上哲次郎 (1856-1944) である。近代日本がナショナリズムを展開させていく中でいかに「侍」や「武士」のイメージを作り上げ、利用してきたのかを論じた Benesch (2014) は、井上の「武士道」が新渡戸の流れをほとんど無視し、江戸時代の軍学者である山鹿素行を「武士道」の基礎を形作った人物として最重要であると取りあげ、素行が配流された赤穂で四十七士に訓戒を与えたとする逸話と組み合わせ、素行と四十七士とを「武士道」の実践者として位置付けていたことを指摘する³¹⁾。井上は、自身の著書だけでなく、少年雑誌や、軍事教育会が発行する雑誌や書籍にも「武士道」に関する文章を数多く寄稿し、日本国内での「武士道」の定義に大きく影響を与え、ストア学派や騎士道と武士道を比較してその優位性を繰り返し説いた³²⁾。

第2版が刊行される頃の井上十吉は、明治43(1910)年に軍事教育会から英文・和文併記版が発刊されることになった雑誌『大和魂』の2人の英文翻訳者のうち主席翻訳者として執筆陣に名を連ねていた³³⁾。雑誌には、毎号必ず、神崎弥五郎、原惣右衛門など四十七士の逸話が掲載され、各号の見開きに1枚付されたカラーの口絵もほぼ毎号、その号に逸話が掲載される四十七士のものであり、『大和魂』にとっては基軸となる重要な連載であったといえる。これらの記事の翻訳は、毎号、井上十吉の分担となっていた。

英文・和文併記版『大和魂』は、巻末に記載された趣意書によれば、和文の記事が士友団の機関紙であった『士友』から抜粋され³⁴⁾、これに井

上十吉と岡田哲蔵の英訳を併記することによって構成されていた。これらの和文記事の著者は、乃木希典や東郷平八郎、そして「武士道」の愛国主義への転用を促した井上哲次郎などが含まれる。『東京朝日新聞』に掲載された編集者である高橋静虎のコメントによれば³⁵⁾、英文・和文併記版の発刊の目的は、外国人に大和魂とは何たるかを示すことであり、新渡戸の著作によって大和魂の定義が理解されていることについては「真の大和魂は決して去る浅薄なものにあらねば余は世界に向って誤解する勿れと云はんと欲す」と、新渡戸とは異なる定義をここでは押し出したいという意図があったことがわかる。磯部弥一郎による井上十吉の追悼記事には、この雑誌と井上との関わりについて「此外に英文大和魂と題する雑誌を発行したこともあった。これは日本の武士道を外人に紹介するを以て主眼としたものであつた」と述べられており³⁶⁾、「武士道」の喧伝を目的とした雑誌に対して、井上が単なる翻訳者ではなく、主体性を持って取り組んでいたことが分かる。さらに、『大和魂』巻末には、井上と岡田の両翻訳者は、彼らの余暇を雑誌の英訳作業に充てていたことが記されており、翻訳官の業務の域を超えて翻訳に取り組んでいたことも『大和魂』への井上の積極的な参加を裏付ける。

この英文・和文併記版『大和魂』が英語圏でどれほどの読者を獲得したのかについては、現在のところ不明で、今後の調査を要する。分かっていることは、軍事教育会が*London Times*を現地の代理店および宣伝媒体として、イギリスでの普及に取り組んでいたことである³⁷⁾。『大和魂』第2号および第3号の巻末には、*London Times*とのやりとりや、1909年12月16日の誌面に掲載された刊行広告が転載され、多くの需要が見込めて反響が大きい旨が記されているが³⁸⁾、橋本順光(2013)が立証するように³⁹⁾、“Bushido”をイギリスに普及させる上での、日露戦争期およびその周辺期の日本政府と*London Times*の共犯的関係を見無視して*Times*の誌面を鵜呑みにすることはできない。

井上十吉の『仮名手本忠臣蔵』の翻訳が17年経って改めて外国人向けに翻訳し直された背景には、日本の美德として、近代的な愛国心という

意味での「武士道」を、海外、特にイギリスに発信したい軍事教育会を含めた軍部の動きがあり、そこで山鹿素行や四十七士を重視する井上哲次郎の「武士道」の理論が牽引的な位置を占めたために、“Bushido”の好例として四十七士の討ち入りを位置づけた英訳が改めて必要になったと考えられる。そこに、英文・和文併記版『大和魂』の翻訳者であり、すでに一度翻訳を出版し、英語学者としても高名な井上十吉はまさに適役であったのではないだろうか。討ち入りを“outward expression of the spirit of Bushido”(武士道精神の表れ)であるとする序文の記述は、四十七士を「武士道」の実践者とする井上哲次郎の考えとよく符合している。

おわりに

ここまで、井上十吉の英訳による『仮名手本忠臣蔵』の初版と第2版との相違点を検討し、第2版には、初版に比べ、海外へ流通させ、外国人読者を得ることがより強く意識され、そうした予備知識のない読者が物語を理解するために、忠臣蔵で描かれる復讐劇を、江戸時代にその完成を見せた“Bushido”の典型として説明を加えていることがわかった。“Bushido”は、日本語の文脈で用いられることはあっても、外国語で四十七士について説明する際に用いられてきた例はなく、すでに説明不要なほど海外で認識されている“samurai”の語ではなく、なぜあえて“Bushido”をここで用いているのかという点が疑問となった。

そこで、初版から第2版が出されるまでの社会的背景を検討し、新渡戸稲造の著書による“Bushido”の語の海外での普及、日露戦争の勝利に湧く日本国内での「武士道」のナショナリズム的方向への意味の変化、そして愛国心としての意味で改めて“Bushido”の語を海外にもたらせようとする動きが、主席翻訳者として軍事教育会の活動に参加した井上十吉に密接に働きかけていたことを指摘した。

井上十吉は、新渡戸の著書から始まった武士

道ブームの風下に立って影響を受けるのではなく、むしろ、“Bushido”の定義を変更し、新しい意味付けを発信する側に立っており、第2版が英文・和文併記版『大和魂』と同じ明治43(1910)年に出版されたことは偶然ではなく、必要性に応じた戦略的なものであったといえるだろう。

〔注釈〕

- 1) 昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書』30、1969年、pp. 289-327、井上琢智(2003)「幕末・明治・大正期イギリス日本人留学生資料(2)」『経済學論究』57(1), p. 111
- 2) Inoue, J., 1895, *Sketches of Tokyo Life*, Yokohama: Torandoおよび、Inoue, J., 1895, *A concise history of the war between Japan and China*, Osaka: Z. Mayekawa, Tokyo: Y. Okuraのこと。特に前者は、アメリカにおいてよく読まれた形跡がある。
- 3) 昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書』30、1969年、pp. 299-301
- 4) 例えば、*The Oxford Guide to Literature In English Translation* (ed. France, P., 2000, Oxford: Oxford University Press)の“Japanese Drama”の項目では『仮名手本忠臣蔵』の英訳についてまとめられており、1880年にロンドンで出版されたFrederick Victor Dickins訳と、1971年のDonald Keen 訳については具体的に言及している一方、その他の日本人による翻訳については、“Several English versions by Japanese translators were published in Tokyo early in the century but gained limited circulation in the West.” (247)と、受容史に与えた影響は小さかったと評価している。また、西洋における忠臣蔵の受容について論じたCohen (Cohen, Aaron M., 2008, “*The Horizontal Chushingura: Western Translations and Adaptations Prior to World War II*”. In *Revenge Drama in European Renaissance and Japanese Theatre*, ed. Kevin J. Wetmore, Jr., New York: Palgrave Macmillan. pp. 153-185)は、“but Inoue’s work does not appear to have received much attention.” (166)と評価を下している。
- 5) 例えば、幕末に来日した、Rutherford AlcockやA. B. Mitfordらイギリス人領事館員の著作が代表的である。
- 6) Nitobe, I., 1900, *Bushido: the soul of Japan, an exposition of Japanese thought*, Philadelphia: The Leeds and Biddle Company.
- 7) 井上訳『仮名手本忠臣蔵』の初出については、現段階では未確認で、先行研究においても諸説ある。磯部弥一郎「故井上十吉氏」(『英語青年』51(5)、1929年、pp. 177-178)によれば、「井上氏の英文で書いた最も早いものには英文忠臣蔵や英文大岡政談などがある。此二書は英語雑誌にて発表された」(『英語青年』昭和4年)とあり、太田昭子氏は初版が1880年に横浜で出版されていると推定した(太田昭子「忠臣蔵の世界—英語訳にみられる変容過程」『教養論叢』88、1991年、pp. 1-28)。ここでは、昭和12年に出版された版が第4版であるところから逆算すると、1917年の版が第3版、1910年版が第2版となることから、1894年に出版されたものを初版とする。
- 8) Inoue, J., 1894, *Chushingura or the Loyal Retainers of Akao*, Tokyo: 博文館
- 9) Inoue, J., 1910, *Chushingura, or the Treasury of Loyal Retainers*, Tokyo: Nakanishi-ya
- 10) 『東京朝日新聞』(1910年11月6日朝刊1頁)
- 11) Inoue, J., 1894, *Chushingura or the Loyal Retainers of Akao*, Tokyo: 博文館
- 12) 高梨健吉『文明開化の英語』pp. 162-176
- 13) 『東京朝日新聞』(1894年3月27日朝刊6頁)に掲載された初版の発売を知らせる新刊広告内で、「日本演劇の模範、日本人種忠義の典型として、之を宇内に誇揚するに足る。今之を廣く海外へも示さんがために、英文に翻訳して、出版す訳者井上十吉君は…」とあり、国内向けの広告ではあるが、この英訳が外国人読者を見込んでいることを示している。
- 14) 江見水蔭「自己中心明治文壇史(抄)」(昭和2年)、『日本近代文学大系』60巻、昭和48年、角川書店
- 15) Inoue, J., 1910, *Chushingura, or the Treasury of Loyal Retainers*, Tokyo: Nakanishi-ya
- 16) Masefield, J., 1915, *The Faithful: A Tragedy in Three Acts*, London: Macmillan
- 17) Gatenby, E. V., 1937, *The Influence of Japan on English Literature, In Transactions and Proceedings of the Japan Society London*, 34(46), London: Japan Society London, p. 58
- 18) Wetmore, Jr, K. J., 2008, “*The Play’s the Things*”: *Cross-cultural Adaptation of the Revenge Plays through Traditional Drama, In Revenge Drama in European Renaissance and Japanese Theatre*, ed. Kevin J. Wetmore, Jr., New York: Palgrave Macmillan. p. 250
- 19) Inoue, J., 1910, *Chushingura, or the Treasury of Loyal Retainers*, Tokyo: Nakanishi-ya, p. vii
- 20) Inoue, J., 1910, *Chushingura, or the Treasury of Loyal Retainers*, Tokyo: Nakanishi-ya
- 21) Inoue, J., 1910, *Chushingura, or the Treasury of Loyal Retainers*, Tokyo: Nakanishi-ya, pp. vii-xi
- 22) *Things Japanese*改訂の様子は、楠家重敏『ネズミはまだ生きている—チェンバレンの伝記—』(東西交

- 流叢書 2)、1986年、雄松堂、pp. 289-321、に詳しい。
- 23) Chamberlain, B. H., 1902 [4th Ed], *Things Japanese*, London: John Murray, p. 72
- 24) Chamberlain, B. H., 1902 [4th Ed], *Things Japanese*, London: John Murray, p. 412
- 25) Chamberlain, B. H., 1927 [Rev. 5th Ed], *Things Japanese*, London: John Murray, pp. 563-564
- 26) 佐藤 堅司「「武士道」といふ語の起原と發達:「武士道思想の發達」を傍系として」、『駒澤地歴學會誌』2、1939年、pp. 7-27
- 27) Mitford, A. B., 1906, *The Garter Mission to Japan*, London: Macmillan
- 28) Mitford, A. B., 1906, *The Garter Mission to Japan*, London: Macmillan, p. 64, pp. 248-252
- 29) Mitford, A. B., 1906, *The Garter Mission to Japan*, London: Macmillan, p. 89
- 30) 高梨健吉によれば、「武士道」の愛国主義への転用は新渡戸の意図するところではなく、西洋人の持つ徳目と同等のものを日本人も持っていることを解き明かしたはずが、孝や忠は日本人の専有物であり至高の徳目であるように喧伝されている状況を新渡戸は危険視していた。(高梨健吉『文明開化の英語』中公文庫、1978年、pp. 212-215)
- 31) Benesch, Oleg, 2014, *Inventing the Way of the Samurai: Nationalism, Internationalism, and Bushido in modern Japan*, Oxford: Oxford University Press, pp. 101-102
- 32) 実際、井上は、井上十吉が翻訳を担当することになる軍事教育会発行の月刊誌『大和魂』の前身となる、日本国内で若い将校たちや兵士たちの士気高揚を目的として発行されていた同名の雑誌において「武士道の話」と題する講話を2号にわたって発表している。(井上哲次郎「武士道の話」『大和魂』第4号、1901年、pp. 2-6、同第5号、pp. 5-6)
- 33) 『大和魂』本誌には主席・次席の区別はなく、2名の翻訳者がただ並べられているが、雑誌の刊行を報じた「東京朝日新聞」(明治42年12月23日朝刊)には、「英文執筆は井上十吉氏之を担任し岡田陸軍大学教授之を補助せりと云ふ」とある。
- 34) 軍事教育会編『大和魂』1号、軍事教育会、1910年
- 35) 「『大和魂』の正体: 英国にて評判の雑誌」「東京朝日新聞」(明治42年12月23日朝刊)
- 36) 磯部弥一郎「故井上十吉氏」『英語青年』51(5)、1929年。ここに引用した雑誌の目的に関する高橋と磯部の理解から、「大和魂」と「武士道」とが同一視されていたことが見て取れることも付け加えておきたい。
- 37) 「『大和魂』の正体: 英国にて評判の雑誌」「東京朝日新聞」(明治42年12月23日朝刊)
- 38) 高橋静虎編『大和魂』第2号、同第3号、明治43年
- 39) 橋本順光(2013)「日露戦争期の英国における武士道と柔術の流行」『阪大比較文学』7号、pp. 178-198